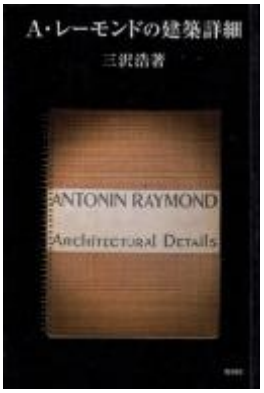
アントニン・レーモンドの作品とディテール　その2



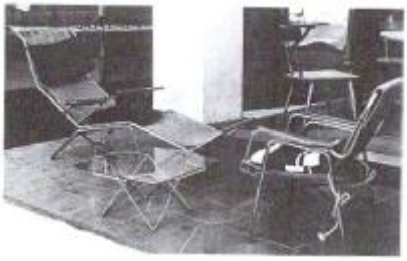
三沢浩氏著書の「A・レーモンドの詳細図集」を読みました。その1にも書きましたが、ANTONIN RAYMOND Architectual Detailsについて解説しています。
読書感想としてレーモンドの開発した詳細について三沢氏の経験と解説が丁寧にページを追って書かれていました。
その中で印象に残ったのは、「レーモンド・スタイル」と事務所員が呼んでいた名称で、それは建物の手法がほぼ一貫していたからです。

・鉄板立ちはぜ葺きの屋根
・たて板張りステイン塗りの外壁
・床は土間コンクリートに仕上げ材
・内壁はロータリーベニア釘打ち透明ラッカー仕上げ
・屋根裏は野地、垂木あらわし、そして引き違いの障子とガラス戸で南面を開放し、外部空間と直結した
・内部間仕切は同じベニア張り、あるいはふすま引き込み、引き違い

特に変わったインテリアがあるのではなく、構造そのものが展開図にあらわれた。強いて詳細図をつくるとすれば、「枠回りと「芯外し」の持ち出し枠であったろう。ただし構造の丸太柱や、丸太梁の扱いは、一様にはならなかった。と丸太に関しては特別とし、材料の仕様が確定されたいたようです。
こうした仕様は勤めていた事務所でも使用していたことを思い出します。

サロモン邸　　外観と居間 ①

著書にはレーモンドとノエミは日本の自然や風土、その気候に着目して、「モダニズム建築」の一環としてその地域性の主張を夫婦ともどもしていたという。ノエミは織物や、じゅうたんをデザインし、ふすまをデザインするとき、色を塗って原画を描いた。木造小住宅は平面も立面もこなしたいた。「イラン大使館」のすべての家具をデザインし図を描いてつくらせ、監理をしている。という。



ノエミ・レーモンドによる家具②

※文中のフレーズの一部は、A・レーモンドの詳細図集より抜粋
①の写真は1962．建築より、②はA・レーモンドの詳細図集より　　22.10.6